

佐伯史談

第五十三号

「郷土史研究」誌
通算第七十九号

昭和四十四年六月二十日

佐伯史談 会

発行所 佐伯市大字福垣宮護寺・羽柴方

感想

郷土史追求の態度

— 伝承のうけとめ方とその裏付け —

会員 羽 柴 弘

私共のように、郷土の歴史的な事柄を追いかけてい
る者にとって、ところの古老などから聞かされる伝承ほど
ありがたいものはない。村里を歩いていて、路傍にふと
見かける白くありげな古塔、碑面に文字もなけれど今は
誰れ祀る人もないような異様な古い墓、足をとめてみる
松共にとつて、その時欽でもかつかいたお年寄でも通つて
くれたら幸いである。

「おぢいさん、これはどうして古墓ですか。何かご存知ち
やありませんか。」
と聞くと、ふがよげれば老人は立ち寄つて来て、鎌を肩
からおろして、

「これはなあ、
と村の昔から言いつぎ語り伝えて来た物語がきける。し
かしそれはふがよげれば、おぢいさんでなくてはな
い。その塔墓が、佐伯氏時代や毛利藩政のころの何かの

来ごとに直結出来たら大収穫である。然し語はそうとう
く運んでくれない。然し私共は失望することなく、「真
に収めたり聴いたこと」をメモに残すことと怠らぬ。ま
うまでもなく古共の物語も、これらの塔墓も、それら郷
土の歴史を解明する何より手がかりになるからである。
一体郷土史とは何

であるか。文字通
りそれは郷土の歴史
である。その領域は
概ねその郷土、一地
方に制することが多
いので、いあゆる地
方史である。そうし
て歴史であるからに
は、一応歴史学に属し
、特に古古学、分野
にさかめば、又氏
俗学や宗教に淵達ふ
かいものがある。左
美術や芸能と取組む
場合もあり、私共の
研修の領域は意外の
ひろがりをもつてい

水子内容

- 夏越 郷土史追求の態度 (羽柴弘)
 - 1 伝承のうけとめ方とその裏付け
- 研究 佐伯氏と佐伯氏の関係 (高橋寛)
 - 1 佐伯氏と佐伯氏の関係
 - 1 佐伯氏と佐伯氏の関係
- 寺南 豊後県佐伯姓について (藤生泰吉)
 - 1 佐伯姓佐伯氏の正統
- 研究 独歩と佐伯…… (山平保)
 - 1 自然と人生
- 研究 浜後井路の調査…… (高橋寛)
 - 1 井路の水利史とそと
- 研究 佐伯の歴史と文化 (藤生泰吉)
 - 1 佐伯の歴史と文化
 - 1 佐伯の歴史と文化
- 探訪記 佐伯の歴史を語る…… (藤生泰吉)
 - 1 佐伯の歴史を語る
 - 1 佐伯の歴史を語る
- 研究会案内 補助資料 研究・会費徴収
会費徴収現状・研究資料・編集後記…… 三

て、素養の浅い素人の私共には、到底何と申すもといふ訳にはいかない。勢い会負はめい／＼のすきな分野にそれ分け入ることになる。つまり研脩の分担といふことになり、自分の得意とする方面に没入する。然しそればかりでなく、会負さんな習いのある人といふようなく相携え相励ましてやつていゝつてゐる。

さてこのような態度で、私共は探訪の途次前記のようである伝承に打つつかる。この伝承（口碑・伝説）とは一体何であらう。別な例を挙げて考えて見よう。

佐伯薩摩守維治——言うまでもなく榊牟礼第十代の主堅田路から日向三河原に落ち、尾高知入嶺で悲憤の最期をとげたその物語を、私は幼少の日に祖母から繰り返して聞き返し、せがんでは何度も聞いて、その都度幼女心に深い感動をうけている。目に一丁字もない祖母は、ちろん「大友興廢記」も「榊牟礼軍記」も知らず、いわゆる伝承として、且てその幼童の日にうけた物語の感銘を呼び起しなから、今その愛する孫に心とこめて語り伝えてくれたのである。これはまことに畏敬すべきことではあるまいか。

私共は数年前、佐伯惟治終焉の地尾高知にまはり、「大神朝臣佐伯惟治魂（魂の古事）」と書かれた墓碑の前に立ちつくし、その悲運をなげいた。又その翌々年には三河原の寺を訪れてその位牌を拜んだ。佐伯領内十社、宇目郷二社、日向六社といわれる惟治をまつる神社には、もう殆んど参拝した。それらの神社には必ずしも、惟治についてゝの伝承がある。堅田青山の翼黒沢に行つて富尾神社の由來記や、惟治の遺品と解される兜（かぶと）も見せてもらつてゐる。神社の境内と並んで、ガマ馬上の惟治に水をささげて奉仕した若狭（わかさ）が尼となつて惟治

の發後ととむらつた定光寺の広々とした敷地がある。又「昔字としてなく」左左の弥四郎」と申し上げることから名乗るようになった多田姓の一族が、今も引つづいて黒沢にある。おけははまたいくらでもある。

大友興廢記や榊牟礼軍記は、嘆息のれらの伝承ととりまといて記述された軍記であり、物語である。特に佐伯惟治に關しては今もなおそのまゝの遺跡や遺物が甞とこゝろにあり、その伝承と共にいつまでも大事に村人たちから守りつづけてゐる。二十社に近い神社に祭神として祭られてゐるものと共に、遺跡や伝承の多いことと当地方他に類例を見ない程である。これらのことを私ども一応ふまえて、郷土史に於ける伝承をどう考へたらうよいかと、次のようにならとめて見よう。

第一に私共の郷土に大まかな歴史的事実が起つた。

（それがその時正確に記録され、又は不審かあり、或はそれと記念する塔碑が建てられたりよいか）

第二に、そのことが人々に向つて感銘をもつて語られた（即ち伝承の發生である。時、伝承の中で人々は身近なことをいつついで、その感銘を語りついで行つた。

第三に、文才のある人がその伝承を物語にまとめた。それは誇張や歪曲が加つたり、全くの誤りをおかしたりすることがある。

何百年も昔のことの伝承である。真実をつかむことはなかなかむづかしい。誇張や歪曲の多い物語でなしに、伝承の中にヒントを求めて、これが裏付けとなる記録や文獻（古文書や信賴の出来る歴史書）、遺跡や遺物、それらを丹念に追求めて、伝承の裏付けとなる資料をうんと集め、その階級によつて、正ししい歴史の真相がつかれるものであるまいか。

（おわり）